

聖泉と潮にみる祈りの空間

— 沖繩の御新下りと豊年祭を中心に —

毛利 美穂

はじめに

祭儀の源流を読み解くとき、異界（天上・地下・常世など）とこの世という神話的空間構造が見えてくる。共同体に豊穰をもたらす、時には災いを与える存在について、折口信夫は「まれびと」（＝来訪神）の概念を用いて説明した。すなわち、神は常世の国から来訪する存在であり、常世の国とは死霊の住む国であるとともに、人々を悪霊から護ってくれる祖先が住むため、来訪神はいわば祖霊神でもある。この神が、毎年定期的に常世の国からやって来て、人々を祝福してくれるというのが「まれびと」信仰である^①。

来訪神による豊穰は、それを統御する王の権威と結びつく。例えば、琉球王国の最高神女・聞得大君の即位儀礼「御新下り」^{ウヅアヲオリ}の原義について、倉塚睦子は「農耕儀礼と結びついた復活儀礼」と解した^②。すなわち、聞得大君とは、豊穰をもたらす神と結婚し、

その霊力を身に帯びる存在であり、王とは、その聞得大君（オナリ神）に守護される存在なのである。この御新下りの巡行の一部は、現在、東御廻り^{アガリウマライ}として定着している。東御廻りは、理想郷・ニライカナイから渡来した創造神・アマミキヨの足跡を巡拝することで、王国の繁栄と五穀豊穰を祈願する行事を指す。沖繩本島出身のユタ・Sさんは、自身のルーツを探る過程で東御廻りを行い、神ダリー^③り中であつた宮古島のMさんは、現在の苦しみを超えて神の道に入るため、東御廻りをするようにと神に告げられたという^④。つまり、神の足跡を巡拝することは、神と対話し、自らの中に神を受け入れていくことを意味するのである。

神を受け入れる過程において水は重要な役割を果たす。久高島の神人・Mさんは、東御廻りにおける祈りの水は、「水と潮が合わさらないといけない」という^⑤。従来、禊ぎ・沐浴など、祭儀における聖なる水については、民俗学などの先行研究から明らかにな

っている部分もあるが、水と潮が合わさる必然性や意味づけについての論は管見ながら見出せていない。そこで本稿は、本島の御新下りと、八重山諸島の豊年祭を例に、聖泉と潮の關係から祈りの空間について考察を加える。

一 水の力

水に呪力を認めることについては、柳田國男や折口信夫などの成果がある。柳田の「孝子泉の伝説」は、靈験あらたかな水が神に捧げる酒と結びついた養老伝説を紹介したものである。

養老改元の詔の文によれば、天皇不破の行宮におわします時、親しく多度山の美泉を掬ませたまひ、その水をもつて盥いたまうに御肌滑らかになり、痛む処を洗いたまへばすなわち御快くならせらる。当時この泉を飲みまたは浴する者、あるいは白髪再び黒く頰齒さらに生ずと言ひ、あるいは眼病その他の痼疾この水によつて輒く平癒すべしとの説もあつた。符瑞書に曰く醴泉とは美泉なり、もつて老を養うべし蓋し水の精なりと。この理由をもつて新たに年号を定めらるるといふのである。これより二十五年前、持統女帝の七年にも、近江益須郡都賀山に醴泉涌くということが伝えられ、沙門法真等をして往いて試みしめられたこともあつた。この時も益須寺に諸方より病人ども集まり来たり、この水を飲んで差えた者が

衆かつたとあつて、しかも後年はたとその評判は絶えてしまつた。
(傍線引用者、以下同)⁶⁾

醴泉は、符瑞書の他、延喜治部省式祥瑞条に「大瑞」と定められている。⁷⁾ 醴泉が祥瑞となつた要因は、『日本書紀』持統紀七(六九三)年十一月条および八(六九四)年三月条に近江国益須郡の醴泉によつて病が癒えたという記事からうかがえる。⁸⁾ すなわち、病を癒し、延命(若返り)を行うがゆえに、靈験あらたかな水と認定されたのである。

特に、白髪が再び黒になり、齒が生えるといった若返りの効果がある水について、折口は「貴種誕生と産湯の信仰と」の中で、常世の変若水の存在を挙げてゐる。

襖祓の話は、此処にはあづかる事として、貴人誕生の産湯は、誰も考へるやうに襖ぎに過ぎないが併し、その水は単なる襖ぎの爲の水ではなく、或時期を限り、ある土地から、此土により来るものと看做された。即、其水の来る本の国は、常世国であり、時は初春、及び臨時の慶事の直前であつた。海岸・川・井、しかも特定された井に湧くのである。其水を用ゐて沐浴すると、人はすべて始めに戻るのである。此を古語で変若と云ふ。其水を又変若水と称する。貴人誕生に壬生の汲んでとりあげる水は、即、常世の変若水であつたのだ。中世以後、

由来不明ながら、年中行事に若水の式が知られてゐる。此は古代には、特定の井に常世の水が湧き、其を汲んで飲み、禊ぐと若返るものと考へてゐた為の名である。⁹⁾

常世国と結びついた特定の海岸・川・井戸に湧く水は「変若水」といい、王の不死・不滅をかなえる。そのため、産湯や沐浴に使うことで、次の王を出現させる「禊ぎの水であり、産湯でもあり、同時に甦生の水にも役立つ」という。

井戸が常世と結びつき、その水が変若水であるという考えは、井戸祭りの願口にも見られる。

掘り当てアレール、井戸^{カマ}又神、水元又神、ニールスク、カネーラ底ガラ、噴キ出テアール、若水、汲ミ飲ミ給ウラルバ、家人衆、足人衆^{タラドクハダ}身肌健康アラシメ給リ、働キ勝イシミ、願イツクバ、神又前、口合^{クハヒ}アラシメ給リ。¹⁰⁾

八重山諸島では、井戸の底に、神がいるニライカナイ（八重山では「ニーラ・カネーラ」）があると考えられている。波照間島では「海の神、底の神、ネーラ、ケーラの地にまします親神」とあり、ネーラ、ケーラは海の底にあると考えられている。谷川健一は、井戸の底であれ海の底であれ、そこに同一の観念が存在することを指摘しているが、波照間島で、井戸の底＝海の底という認

識があつたことは示唆に富むだろう。

変若水はまた、「孵^ナで水」ともいう。『おもろさうし』「くろさよこたりが節」には、孵^ナで水と変若水が同義であることが示されている。

一 こほり肝寄りや

吾の肝寄りや

天のてだ

按司添い 守ら

又 今日の良かる日に

今日のきやかる日に

又 首里 降る 雨や

孵^ナで水ど 降り居る

又 ぐすく 降る 雨や

若水ど 降り居る

(卷七・三八六)¹²⁾

天の太陽(神)は王を守り、霊力のある水が雨となって首里や王城に降る。つまり、孵^ナで水・若水の力が王に降り注ぎ、王はその水を浴びるという形で身に取り込むことで、生命力や霊力を得る(更新する)ことを願っていることがわかる。なお、この水は、「天のてだ」とあるように、天の水と解釈できる。「聞得大君ぎやおぼつ嶽 在つる 孵^ナでる上水よ」(卷七・三四八)でも、再生の

力を持つ水は、元々、天上世界（「おぼつ嶽」）にあるものだと
う考えがうかがえる。折口は「若水の話」に、孵で水⇨変若水に
ついて次のように述べている。

すずると言ふ語には、前提としてある期間の休息を伴うてゐ
る。植物で言ふと枯死の冬の後、春の枝葉がさし、花が咲い
て、皆去年より太く、大きく、豊かにさへなつて来る。此週
期的の死は、更に大きな生の為にあつた。（略）畢竟卵や殻
は、他界に転生し、前身とは異形イキヤウの転身を得る為の安息所で
あつた。蛇は卵を出て後も、幾度か皮を蛻ぐ。茲に、這ふ虫
の畏敬せられた訣がある。¹³

孵で水⇨変若水は、周期的な死を経て、新たに転生するための
装置である。天上の領域に属していた水が、他界の概念の広がり
にしたがつて、ニライカナイや常世、海の底と結びついたと推察
される。

祭儀に用いられる水は、異界からの神の力を帯びている。その
ため、聖なる水に触れることによって、この世の理ではなしえな
い延命や若返り、そして王としての生まれ変わりを遂げることが
できると考えられたのである。

二 御新下りの水

産湯による生まれ変わりが即位儀礼に反映される例として、聞
得大君の御新下りの「御水撫ウビナダで」が挙げられる。

御新下り祭儀については、首里・与那原・サヤハ嶽（斎場御嶽）
を結ぶ重層的構造が指摘されており、倉塚はさらに、与那原にお
ける御新下りの古態性を示すとともに、与那原・久高島・サヤハ
嶽を結ぶ祭儀空間の聖化とその拡大について述べている。

与那原における古態性を確認していこう。

第十五代聞得大君（尚瀬王女）の御新下り祭儀を記録した『聞
得大君御殿並御城御規式之御次第』（以下『式次第』¹⁵）を中心に、
第十四代聞得大君（尚温王妃）の御新下り祭儀を記録した『聞得
大君加奈志様御新下日記』（以下『日記』¹⁶）をみると、聞得大君は、
首里において、王国の最高神女として守護すべき対象が王である
ことを明確にした後、次の与那原浜に向かう。

与那原の浜の御殿について、『琉球国由来紀』卷十三は次のよう
に記す。

浜ノ御殿 神名、アマオレッツカサ

与那原村

昔、比浜ノ御殿へ天女降りシ給ヒタルトナリ。

聞得大君御任官之時、爰ニ御新下り、オヤガワノ水ヲ御撫

被_レ召也。与那原へアラオレ被_レ召ト云ハ是也。右御儀式、左
二記。
(以下略)¹⁷

浜の御殿は、天女が降り立った地である。天女に付された神の属性については明らかではないが、『球陽外卷』『遺老説伝』には豊穰の神としての属性を付された聞得大君と浜の御殿との関係が記されている。

さて大昔のことであるが、聞得大君が侍女を五、六十人ひきつれて船を出して、久高島に行つて祭祀をすることになって、海洋を渡つていく途中で、風の向きが変わつて、久高島から遠く過ぎて北の方向へ船は流されて行つた。どんどん風の押すままに流された船はやつと大きな島に着いた。そこは日本であつた。(略) ちょうどこの時分に、琉球では雨が何ヶ月も降らないで、長いひでりが続いた。そのために穀物は全部枯れてしまつて、食べ物は何もないものだから、人々はどうして生きていくかとそれだけが心配だつた。そこで国王は沖縄の島中の祭祀を司つている祝女を集めて「こんなにみんなが苦しんでいて、雨も降らないし、作物も枯れてしまつているが、何かよい考えはないか」とおたずねになつたが、これといういい考えも浮かばないので、祝女たちはただだまつていた。(略) そのとき一人の祝女が前に出てきて「おそれながら申し

上げます。こんなに国中の人が苦しんでおりますのは、よく考えてみますと、聞得大君の船が流されて、今日まで国としての祭りができないから、こんなことになつたと存じます」と言つたら、全部の祝女が口を揃えて「そのとおりでございます」と申し上げた。その時、急に君摩物神^{きんまものかみ}がみんなの前に現われた。君摩物神は聞得大君がかしずく守護神である。「聞得大君は今日日本にいる。お前らは早く船を廻して日本に行つて、迎えてこい」と言われた。そこですぐに国王は「場天祝女は船頭になれ、そして、大城祝女は船の水夫の頭として、女五、六十人を乗せて日本に向かつて船を走らせよ」と命じられた。集まつた祝女は場天祝女の言うとおりに動いて、船を日本に向けて出した。幸い途中逆風にもあわないうで日本の島々に着き、やつと聞得大君を探しあてることができた。(略) 聞得大君は「ではみなとともに国に帰ろう」とおおせられて、一同船に乗つて順風を受けて場天の浜に着いた。(略) 聞得大君は首里王城にお帰りにはならないで与那原に家を建てられお住まいになつた。聞得大君が琉球にお帰りになつてからは、作物も豊かにみのり、かんばつや長雨もなく、おだやかな世の中になつたということである。聞得大君はどうとう首里にお帰りにならないで、ここでおなくなりになられたので、三津嶽に葬つた。村の人々は神様としてあつく信じているとのことである。¹⁸

船で久高島に向かう途中に逆風に遭って日本国に漂着した聞得大君が、その後、琉球に戻り居を構え、骨を埋めたのが与那原の浜の御殿であるという。そしてこれは、聞得大君に豊穰の神を重ね合わせた説話とみてよい。

現在、久高島に渡るためには、南城市知念にある安座真港から船に乗るが、遺老説伝からわかるのは、当時は与那原浜から船で久高島に向かっていったということである。大正八（一九一九）年の地図でも、与那原浜がかつて海に面していたことが確認できる（図一）。

天女が降り立った浜の御殿で聞得大君が行うのは、親川の水を汲み、その水で額を撫でる「御水撫で」である。これは、水の方を直接身に取り込む方法である。親川の水を使う理由について『由来紀』は次のように記す。

此井ハ、浜ノ御殿へ、天降シ給フ、天女之御子、産井ノ由、申伝ト也。

親川の水は、浜の御殿に降り立った天女が、その子の産湯に使ったものである。現在も、清廉な水が滔々と流れている（図二）。『日記』には親川の水で聞得大君は「七度の御水撫で」を行うと記しており、産湯である水をつけることで、聞得大君は王国の最高神女に即位することになる。倉塚はさらに、親川を「五穀豊穰



図 1

左：1919年の与那原浜

右：2017年の与那原浜跡

○=親川

この地図は、国土地理院作成地図を元にした時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」((C) 谷 謙二) により作成したものです。



図2 親川(与那原町)
(撮影者) 毛利美穂、(撮影年) 2016年

つ聞得大君はその末裔であったらう」と御水撫でを受けた聞得大君に豊穰の神としての属性を付している。

三 王と水の神話

神話において、王と水の関係はどのように描かれているのか確認しておこう。

『古事記』上巻における海神の国訪問は、天つ神の子である火遠理命(山幸彦)と海神の娘・豊玉毘売の結婚を描くことで、天皇

の血統が、天つ神と山の神、そして海神の血統を加えた、地上世界の支配者たる呪能を持つことを示したものである。

「天女の子の産井もしくは天女自身が浴びた水で聞得大君がウビナデをし、かつその儀礼が豊穰にかかわっているということになれば、琉球の天人女房は豊穰祭を掌る神女の説話的形象であり、かつ聞得大君はその末裔であったらう」と御水撫でを受けた聞得大君に豊穰の神としての属性を付している。

「我、泣き患ふるぞ」といひき。爾くして、塩椎神の云はく、「我、汝命の為に善き議を作さむ」といひて、即ち無間勝間の小船を造り、其の船に載せて、教へて曰ひしく、「我其の船を押し流さば、差暫らく往け。味し御路有らむ。乃ち其の道に乗りて往かば、魚鱗の如く造れる宮室、其綿津見神の宮ぞ。其の神の御門に到らば、傍の井上に湯津香木有らむ。故、其の木の上に坐さば、其の海の神の女、見て相議らむぞ」といひき。

故、教の隨に少し行くに、備さに其の言の如し。即ち、其の香木に登りて坐しき。爾くして、海神の女豊玉毘売の従婢、玉器を持ちて水を酌まむとする時に、井に光有り。仰ぎ見れば、麗しき丈夫有り。甚異奇しと以為ひき。爾くして、火遠理命、其の婢を見て、「水を得むと欲ふ」と乞ひき。婢、乃ち水を酌み、玉器に入れて貢進りき。爾くして、水を飲まずして、

御頸の瓊を解き、口に含みて其の玉器に唾き入れき。是に、其の瓊、器に著きて、婢、瓊を離つこと得ず。故、瓊を著け任ら、豊玉毘売命に進りき。

爾くして、其の瓊を見て、婢に問ひて曰ひしく、「若し、人、門の外に有りや」といひき。答へて曰ひしく、「人有りて、我が井上の香木の上に坐す。甚麗しき壯夫ぞ。我が王に益して甚貫し。故、其の人水を乞ひつるが故に、水を奉れば、水を飲まずして、此の瓊を唾き入れつ。是、離つこと得ず。故、入れ任ら、將ち来て献りつ」といひき。爾くして、豊玉毘売命、奇しと思ひ、出で見て、乃ち見感でて、目合して、其の父に白して曰ひしく、「吾が門に麗しき人有り」といひき。爾くして、海の神、自ら出で見て、「此の人は、天津日高の御子、虚空津日高ぞ」といひて、即ち内に率入りて、みちの皮の畳を八重に敷き、亦、絶畳を八重に其の上に敷き、其の上に坐せて、百取の机代の物を具へ、御饗を為て、即ち其の女豊玉毘売に婚はしめき。故、参年に至るまで其の国に住みき。

〔古事記〕上巻・海神の国訪問¹⁹⁾

兄・火照命の鉤を探す火遠理命に、塩椎神（潮流を司る神）が解決の手立てを教える。すなわち、海神の宮に行き、その宮の入口そばにある井戸のほとりの神聖な桂の木の上にいると、海神の娘・豊玉毘売が相談に乗ってくれるだろう、というものである。

井戸のそばでの火遠理命と豊玉毘売の出会いには、『古事記』上巻・天の安の河の誓約にみる、天真名井をはさんで向き合う天照大神と須佐之男命と同じ構造を持つている。天・山の属性を持つ火遠理命と海の属性を持つ豊玉毘売の間には鵜葺草葺不合命（神武天皇の父）が誕生し、そして天の属性を持つ天照大神と海の属性を持つ須佐之男命の間には、三女神五男神が生まれる。このような天真名井神話をはじめとする井戸の発想に、聖地や異界を結びつける地下の水の存在を確認することはできるが、海神の国訪問でも、火遠理命と豊玉毘売を結びつけるものとして井戸が位置づけられているのである。

王が海神の血統を受け継ぐ例は、古代朝鮮神話にも見られる。新羅の解脫王は、竜の血統を受け継いでいる。

私はもと竜城国のもので（略）、私の国には二十八の竜王がおります。みな人の胎内から生まれたものですが、五、六歳ごろに王位を継ぎ、万民を教え、性命を正しくします。八品の姓骨があるにはありますが、例外なくみな大位にのぼるので、ときに父王の含達婆が、積女国の王女を迎えて妃にしましたが、長いこと子だねがなかったので、お祈りして子を得たところ、七年後に大きい卵を一個産みました。そこで大王が群臣たちを集めて「人が卵を生むということは、古今にその例がない。これは不吉の兆である」といわれ、それか

ら箱を作って中に入れ、それに七宝と奴婢を船いっばいに積んで海に浮かべてから、「勝手に因縁のある地について、国を立て家をおこしなさい」とお祈りしました。するとにわかには赤い竜が現われて船を護衛し、ここにやってきたのです。

〔『三国遺事』 卷第一紀異第一〕²¹⁾

王が竜神と結びつく背景には、農耕に不可欠な水を掌握することが王位存続のための要素であるという論理がある。水を支配できるからこそ、安定的な収穫を確保できるのである。

日本本土（『古事記』）や朝鮮半島（『三国遺事』）の神話と異なり、琉球の王には、海神（竜神）の血統は見られない。しかしながら、第二尚王統・初代尚円王は、水を掌握した王として描かれている。

尚円公は、幼少の時から百姓に交わり、耕農を生業としていた。ある時、早魃があつて、田んぼの水は干上がってしまった。村人は日夜水の心配をして、その手当に奔走していたが、尚円公は自分の田んぼに何もなかった。それでも、雨天のように水が満ちていた。村人はこれが聖なるきざしであるのも知らず、尚円公が他人の田んぼから水を盗んでいると騒ぎ立てた。

〔『中山世鑑』 卷四〕²²⁾

早魃にも関わらず、尚円の水だけは枯れなかったことは、尚円に王の資質が備わっていることを示している。さらに、水を支配する尚王が、伊是名島を追われて本島に渡り、王となるという、共同体の外から聖者がやってくる来訪神の系譜も確認できるのである。

四 八重山諸島の豊年祭と水

来訪神という観点から、八重山諸島の豊年祭を確認していく。

波照間島は、八重山諸島の中でも神行事が多く、現在でも年間四十回以上にのぼる。豊年祭は、五月から六月の辺りに行われる。島には、五つの集落があり、島の西にあるフカが、中央にあるナイシとマエ、東にあるミナミとキタの四集落より宗教的に優位にあるとされている。それは、ブナリ神信仰において、西がブナリ（姉妹）、東がビギリ（兄弟）であり、西が宗教的に優位にあるととらえられているからであるが、西のミシクゲー（図3）から波照間島の兄妹始祖創世神話が始まっていることも一因であろう。

昔この島に大勢の人が住んでいた。そして毎日のどかな暮しをしていた。（略）今まで雲一つもなかった空の一角から急に黒い雲が起きたちまち島の空を包んでしまった。そしてパラパラと雨が降ってきた。ところがこの雨は黒い色でしかもねばっこくてねちねちしている油雨であつた。そしてこの油雨

にぬれると、人間も牛も生きものという生きものは、ばたばたと死んでしまつた。そして島の生きものは死に絶えていなくなつた。ところが幸いなことには、二人の兄妹がいた。この二人は雨模様の天気になつてきたので、ちようど近くのミシクヌ洞窟^{がま}にかくれた。(略)雨がすっかり止んで、陽もきらきら照つてきたので、おそろおそろとに出てみた。すると人家も一つも見えなくなつており、また木や草や、生きものとして何一つ残つていないものはなかつた。(略)がっかりした二人は、先にかくれていたミシクヌ洞窟にもどつて行って、そこで暮らすことにした。(略)そこで二人は夫婦となつた。そして子供が生まれた。ところが初めてできた子供はボーズという魚に似ているのである。(略)「どうもこんな子供が生まれるのは、この土地がわれわれに合わな



図3 波照間島・ミシクゲー
(撮影者) 毛利美穂、(撮影年) 2012年

いせいであるにちがいないと思う」(略)ほらあなを出て上の方に家を建てて住んだ。しばらくしてまた子供ができたが、こんどはハブのような子が生まれてきたので、ここもよくないというので、ヤグというところに小屋を建てて移つた。(略)どうも風水がよくないということで、外部落に移動したらこは風水もよく子供も人間らしい立派なのが生まれてきた。はじめてのこの子のことをアラマリヌパーと呼んで今日もこの人の墓を祭つているということである。こうして波照間島は再生したといわれる。⁽²⁵⁾

兄妹は、海岸の洞窟から現われる。洞窟は、地下の通路の入口とも考えられており、西表島の南風見・仲間・古見に通じているともいわれるが、このような地下・洞窟・海に向こうの国から兄妹は再生したと考えることができる。すなわち、来訪神である。

兄妹は洞窟から出た後、三回、場所を移動している。最初、湧き水がある海岸(ニシ浜)の端の岩の下(ミシク)に居を構えたが、生まれた子どもが魚だった(A)。次に、畑のそばに石を積んで片屋根の家を作つたが、生まれた子どもはハブのような子だった(B)。最後に、四つの角の家で、茅で屋根を四つの形にして作つて生まれた子どもが、はじめて人間らしい子であったという(C)。豊年祭では、A・B・Cの順に巡行が行われており、それぞれに神井戸が存在する。Aの井戸がミシクゲーであり、Cは、

フカ集落のアースクワー（御嶽）の前にある井戸である。

Aで生まれた子が魚であった理由として、海との距離が関係するだろう。島は、水を通さない泥岩の地層の上に、透水性の琉球石灰岩の地層が重なる土地の性質から、降った雨は、石灰岩層を通り抜け、泥岩層の境目まで降り、泥岩層の地形に沿って地下水として流れて海底に注ぎ込む。そのため、水を得るには、この泥岩層まで井戸を掘り下げる必要がある。海に近い場所は、潮位の影響を受けやすく、海水が混じることが多い。そのため、真水を得るためには海から離れており、かつ、泥岩層まで掘り進められる場所である必要がある。Cのフカ集落は、泥岩層が一番浅く、井戸により容易に水が得られる場所であるため、他の集落に先駆けて、このような始祖創世神話がつくられたといえる。²⁶⁾すなわち、Aは海の領域にあり、Cは人間（この世）の領域にあったと考えられると、Aで生まれた子が魚であった理由も首肯できるだろう。

豊年祭はミシクゲーから出発し、各集落では集落の神井戸の水を汲んで神を迎える。これは、豊年祭が、海からやってきた来訪神は、各集落の水に迎えられて島を巡行することを意味しており、豊年祭という祈りの場における、海とこの世という空間構造が見えてくるのである。

おわりに

波照間島の豊年祭における海との距離感と水の扱いは、石垣島

白保の豊年祭でも確認できる。

明和八（一七七二）年四月に発生した大津波で壊滅的な被害にあった白保は、比較的被害の少なかった波照間島からの強制移住によって再建された。そのため、波照間御嶽をはじめ、波照間島とのつながりが色濃く残っている。

白保・嘉手苅御嶽の豊年祭の世話役のひとりであるAさんは、幼いころ、豊年祭の準備で、海の水を汲み、山から水を汲んで供えたと言ってくれた。²⁷⁾海の水をいつ汲みに行くのかと質問すると、満潮の時だという。その理由は「（満潮時でなければ）神様が来ないから」であった。先祖が波照間島からの移住者で、白保・波照間御嶽の豊年祭に向かうというNさんは、潮が満ちた海を見て「神様が来た」と語った。²⁸⁾

海からの来訪神は満潮にのってやって来るため、御嶽では、海の水と山の水を用意して神を迎える。このことは、久高島の神人・Mさんの、東御廻りの祈りの水は「水と潮が合わさらないといけない」ということを髣髴とさせる。

そこで、いま一度、御新下りの祭儀を確認してみる。

親川で御水撫でを終えると、聞得大君は再び「与那古浜」に移る。「与那古浜」は、『式次第』では「与那久浜」、『由来記』では「与那原浜」、『日記』には「与那古浜・神之庭」と記されており、『日記』は、この「与那古浜神之庭」の神名について次のように記している。

与那古ばま、なでかわの御すじよきのはま、潮でるわのおす
じぢれはま、潮はなづかさ御筋かなし

小山和行は「しぢれはま（しぢれ浜）」を「すでる浜」と解す。⁽²⁰⁾

この説は、与那古浜に、再生を意味する「躰でる」の語義を内包させることで、この浜を神女の復活儀礼と密接な聖域として、聞得大君の御新下り祭儀との不可分な関係を見出しており、示唆に富むものである。すなわち、御新下り祭儀は、潮とともにやってきた来訪神の力を、親川の聖なる水と与那原浜の潮によって、聞得大君の身につけるものであり、その祈りの空間には、聖泉と潮が不可欠なものとして設定されているのである。

本稿では、本島の例として御新下りを取り上げたため、検討範囲が狭くなったが、久高島の神人・Mさんが、東廻りの祈りの水について述べていることは重要である。

東廻りは、ニライカナイから渡来したアマミキヨの霊地を巡拝する行事、つまり来訪神への祈りである。そして、例に挙げた八重山諸島の豊年祭もまた、海からやってきた来訪神を迎える祭儀である。両者に共通しているのは、海の向こうから豊穡をもたらす神を迎えることであり、豊穡を祈念するための祈りの空間には、神をとりまく潮と、豊穡をもたらす水（聖泉）を共に用意する必要があると解釈することが可能となるのである。

注

- (1) 折口信夫「国文学の発生」、『折口信夫全集 第一巻』、中央公論社、一九七五、三〇六二頁。折口のまれびと概念の発想は沖繩での現地調査による。
- (2) 倉塚暉子「古代研究と沖繩学」、『叢書わが沖繩 第五卷 沖繩学の課題』、日本図書センター、二〇〇八、二四七―三五頁。「水撫で」の原義として、「聖水をくぐることによる復活信仰があったことは疑いえない」と述べている。
- (3) 二〇〇七年五月のインタビューより抜粋。
- (4) 二〇一一年八月のインタビューより抜粋。
- (5) 二〇一六年一月のインタビューより抜粋。
- (6) 柳田國男「孝子泉の伝説」、『柳田國男全集9』、筑摩書房、一九九〇、三〇―五一頁。
- (7) 国史大系『延喜式 中篇』、吉川弘文館、一九八七、五二七頁。
- (8) 日本古典文学大系『日本書紀』下、岩波書店、一九六五、五二三頁。
- (9) 折口信夫「貴種誕生と産湯の信仰と」、『折口信夫全集 第二巻』、中央公論社、一九七五、一三八―一四四頁。
- (10) 前花哲雄「定説に対する疑問——ニライ・カナイ考」、『八重山文化論集』、八重山文化研究会、一九七六、四五頁。
- (11) 谷川健一「第十三章 ニライカナイ」、『日本人の魂のゆくえ——古代日本と琉球の死生観』、富山房インターナショナル、二〇一二、一九一―二一頁。
- (12) 日本思想大系『おもしろさうし』、岩波書店、一九七二、一四七頁。
- (13) 折口信夫「若水の話」、『折口信夫全集 第二巻』、中央公論社、一九七五、一〇一―一三七頁。
- (14) 山内盛彬「聞得大君と御新下り」、『叢書わが沖繩 村落共同体』、日本図書センター、二〇〇八、三二九―三四一頁。
- (15) 琉球大学附属図書館・沖繩関係貴重資料 デジタルアーカイブ「聞得大君御殿並御城御規式之御次第」、二〇一七・一〇・九閲覧。

- (16) 琉球大学附属図書館・沖縄関係貴重資料 デジタルアーカイブ「開得大君加那志様御新下日記」、二〇一七・一〇・九閲覧。
- (17) 外間守善・波照間永吉編著『定本琉球国由来記』、角川書店、一九九七、二二七頁。
- (18) 仲井真元楷編『沖縄民話集』、社会思想社、一九七四、六六一―七〇頁。
- (19) 新編日本古典文学全集『古事記』、小学館、一九九七、一二五―一二九頁。
- (20) 日本古代における井戸や水に関する研究は、柳田国男（『定本柳田国男集 第一巻』筑摩書房、一九六三など）や折口信夫（『折口信夫全集 第二巻 古代研究（民俗学篇Ⅰ）』中央公論新社、一九七五など）の連続の研究史を含め、青木紀元「日本古代の『井』に対する神聖観」〔『神道史研究』第参巻第五号、一九五五〕、西原啓子「天の真名井」の伝承と忌部氏」〔『同志社国文学』第一二二号、一九七六〕、鴻巣隼雄「記紀神話の発想——中国古典との比較による『水』への志向と評価について 其の一——」〔『古事記年報』二六、一九八四〕土橋寛「天真名井神話の構造と形象」〔『国語と国文学』第六二巻第七号、一九八五〕、北野達「『天真名井』考」〔『古事記年報』二七、一九八五〕など多数ある。
- (21) 一然著・金思燁訳『完訳三国遺事』、六興出版、一九八〇、八二頁。
- (22) 首里王府編著『訳注中山世鑑』、榕樹書林、二〇一一、一一二〇頁。
- (23) 沖繩にみられるオナリ神信仰と同様である。オナリ神信仰とは、姉妹は兄弟に対して靈的に優位にあり、彼らを守護する神であるとする信仰のことをいう。
- (24) 泉水英計「波照間島における東西双分観の批判的検討」、『常民文化』第一五号、一九九二、一一三―二頁。
- (25) 仲井真元楷編『沖縄民話集』、社会思想社、一九七四、一六一―一九頁。
- (26) 木崎甲子郎編『琉球弧の地質誌』、沖縄タイムス社、一九八五、一八

四頁。

- (27) 二〇一七年八月のインタビュより抜粋。
- (28) 二〇一七年八月のインタビュより抜粋。
- (29) 小山和行（『御新下り』の歴史的構造——開得大君即位祭儀をめぐって——）、『沖縄文化研究』一四、一九八八、一八一―二六五頁。

A study of the fountain well and seawater in a “place of prayer”

MOHRI Miho

When reading the origin of the rituals, the mythical spatial structure of the next world and this one start to make sense. Regarding the existence that brings abundance to the community as well as the occasional disaster, Nobuo Orikuchi explained using the concept of “marebito” (= visiting God). Abundance brought by visiting gods is linked to the authority of the king in power and the “uaraori” enthronement ceremony ritual of the highest goddess of the Ryukyu Kingdom, “Kikoe-no-oogimi” is understood as a ceremonial resurrection associated with agricultural ceremonies. Part of this uaraori pilgrimage is now established as “Agari Umai”, featuring the footprints of the creative God Amamiyō who came from utopia, the Nirai-Kanai.

Water plays a key role in accepting God. Mrs. M, the Sherman of Kudakajima, holds that the water in the eastward prayer must have “water and seawater combined”. Conventionally, apotheosis toward water or the sea has been pointed out. Even during the harvest festivals of the Yaeyama Island archipelago, “water and seawater” are combined. However, from a conventional perspective, the inevitability of combining “water and seawater” cannot be found.

In this article, I cite examples including Uaraori of the Main Island and the Harvest Festival of the Yaeyama Islands and discuss aspects ranging from the relationship between Seisen and seawater to a place of prayer from the perspective of the existence of visiting gods, as a common point of both rituals.

キーワード：聖泉 (holy fountain)、潮 (seawater)、沖縄の儀礼 (ritual of Okinawa)、祈りの場 (place of prayer)